

# 残された家族の思い、 その軌跡を見つめたルポルタージュ。

## 映画の概要

映画の舞台である宮城県東松島市。仙台市からおよそ40kmの距離にあり、牡蠣や海苔など資源豊かな海に面している風光明媚な街だ。しかし、2011年3月11日の14時46分の東日本大震災による大津波で多大な被害を受けた。1109人が亡くなり、25人が現在も行方不明のままになっている。仙台と石巻の沿岸部を走る仙石線も、大きな被害を受けたが、高台のルートに変更した東北仙石ラインが新たに開通した。宮城県内の中でも死者数が、石巻市、気仙沼市に次ぐ、3番目に多い街になった。

東北仙石ラインの陸前小野駅に近い、小野駅前応急仮設住宅やその周辺に暮らす住民たち取材するようになったのは、2011年9月のころからだ。震災からしばらくは、声をかけられるような状況ではなかったが、1年を待って、仮設住宅の人たちや、一戸建てに暮らす家族の心の中に、少しずつ歩み寄った。玄関を開けると、そこに家族の遺影が目の中に飛び込んでくる。

命日は揃って3月11日。これが東北沿岸部の現実だった。夫を津波で亡くした妻。妻を亡くした夫。仮設住宅で一人暮らしをしている。

行方不明になっている娘の形見も何も出てこない中、一枚の免許証が瓦礫の中から発見された。娘がこの世に存在していた証が見つかった。残された母は、歯を食いしばってこれから生きていくしかない。話し相手が突如いなくなった夫は、ご近所の人に夕食を毎晩作ってもらい、取りにいく暮らしに変わった。テレビを見ながら晩酌を唯一の楽しみにしている。

娘が亡くなり、孫を育てなくてはならなくなった祖父母は、二度目の子育てが始まったと悪戦苦闘の日々を過ごす。「ママの声が聞きたい！」と本音を漏らす孫。

残された家族は、亡くなった家族をいつも軸にし、その軌跡を追いかけている。



## この映画ができるまで

おおにしのぶお  
監督の大西暢夫の自宅は、宮城県東松島市から約800キロも離れた岐阜県の池田町という街にある。震災があつてから、ただならぬ状況に困惑しながらも、カメラマンとしての役目を考え、支援物資を車に乗せ、あてもなく東北に向かった。

テレビ画面で見るよりも、現実には凄まじく、見るものすべてに緊張が走った。茨城県からスタートし、原発の取材もしながら、北は久慈市まで、多い時には月に2~3回は東北の沿岸部に通い続けた。

そして岐阜新聞で、『東北沿岸600キロ 震災報告』の連載が始まった。同じ頃、池田町の行きつけのお店



だった『Bluse Cafe』を拠点に、取材報告会を定期的に行う企画も立ち上がり、町民や近隣の街など、多くの方が参加した。報告会では、写真を見せながら、茨城県から岩手県の状況をリアルタイムに説明した。

映画の舞台になった東松島市も撮影していたが、その時は、まだ立ち寄り程度だったが、2011年9月に東北を訪れたところ、小野駅前応急仮設住宅が建ち、新たな暮らしが始まっていた。

そこで自治会長の武田文子さんに声をかけられたのが、すべての始まりになった。武田さんに「何が必要ですか？」と尋ねると、即座に「布団！」と答えた。避難所から引っ越したばかりで、布団までは支給されていなかった。

東北の冬はもう目の前に来ていた。池田町に戻り、町長に東北の状況を説明し、布団の提供をお願いしたところ、回覧板、有線放送、新聞など地元のメディアを駆使し、町は町民に発信した。その結果、380組の新品の布団が集まり、小野駅前応急仮設住宅に運び込むことになった。それが、東松島市民と池田町民をつなぐ大きなきっかけになった。

そのころから、岐阜新聞で『3.11の証言』と題して2回目の連載が新たに始まった。小野駅前応急仮設住宅に暮らす人たちのインタビュー記事だ。報告会は、ときどき東松島市からゲストを迎えながら、毎回、満員御礼の状態が続いた。お客さんから「現地を見てみたい！」という声もあがり始め、炊き出しボランティアや海岸清掃ツアーなど3回行った。この運営資金や、義援金、取材経費などは、岐阜新聞の二つの連載記事を小冊子にした売り上げが大半で、他に報告会の入場料、寄付なども資金の一部になった。

報告会は、9回目以降、写真から映像に見せ方を変えた。毎回、20分~30分の状況を伝える映像を流してきたことで、素材が集まってきた。それをまとめて、ドキュメンタリー映画を制作しましょう！と報告会の中で新たな企画を立ち上げた。参加者は、15回の報告会でおよそ400人。報告会に参加することで、映画製作の協力者になっていただいた。その名をエンドロールに連ねた。



仮設住宅の住民らの協力で布団を運び出す



16回続いた東日本大震災映像報告会の様子



映画にも出演している東松島市からのゲスト

